

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



国連持続可能な開発サミットで採択された17の目標と169のターゲット。ポイ捨てごみの問題は12、14、15に当てはまる

CHAPTER 1

ごみの常識
common sense of garbage

ごみは自然と出るもの。当たり前のように捨てているごみが今、河川を、海を、私たちの生活までも蝕もうとしている。

自然と都市が調和するまち

東温市は、恵まれた自然環境と松山市近郊にある都市近郊の田園都市として知られている。

商業施設や利便性の高い交通網が発展する一方、重信川が市の中央を流れ、潤い溢れる水辺に恵まれるとともに、南部には皿ヶ嶺連峰など、豊かな自然と渓谷美に恵まれている。日々、市内でさまざまな人が住みやすいまちづくりに貢献している。

ごみが与える影響

市内のごみの年間排出量は7,099t(令和2年度)で、1日一人あたり581gのごみを排出している計算になる。

ごみの中でも、道路や川などに捨てられたごみ、いわゆるポイ捨てごみは景観を損ねるだけでなく、海の生態系を乱すほどの影響が出ている。東温市は内陸に位置し、海への影響は少ないと思われがちだが、市内を

流れる川に漂流するものは最終的に海へとたどりつく。瀬戸内海の海底ごみの重量、質量は日本の他の地域に比べて多く、海底ごみの多くの原因が瀬戸内地域の陸側の河川から流れ出た漂着ごみと言われている。道路や川に捨てられたごみは海の生き物が食べ、いつか私たちの口に運ばれてしまうかもしれない。そうなる前にポイ捨てごみへの対策は欠かせない。

地域が抱えるごみ問題

ポイ捨てごみに頭を抱える地域は市内でも例外ではない。

ボランテアで地元の川掃除をする藤本富子さんは、季節を問わず、川の様子を見て地域の仲間とごみを拾っている。「多いときは10袋以上のごみが出ることもあります。時期によっては1週間に1回のペースでごみを拾うこともあります。ごみはお菓子の袋や弁当ガラ、ペットボトルなど種類はさまざまです」と話す。

川は苔が生え、足元が滑りやすくなっている。流されたごみは水によってかさが増し、かなりの重さになる。さらに、冬には寒さが加わるので川掃除は決して簡単なことではない。

「川は上流まで繋がっているのだから、ごみがポイ捨てされているのかわかりません。今は地域でどんな対策ができるか模索中です。ポイ捨てごみがなくなることを願っています」



1_ できる限りの範囲でごみを拾う / 2_ 川は大きな岩や苔で滑りやすくなっている / 3_ 2月の寒さに耐えながらのごみ拾い / 4_ ごみが多いときには10袋を超えることも / 5_ 川にはペットボトルなどのプラスチックごみが目立つ /

Information



不法投棄防止看板貸出中

ごみのポイ捨て、不法投棄は犯罪です。市役所では、不法投棄防止看板を貸出中。貸出は担当課まで。

☎環境保全課 ☎ 964-4415

POINT 数字で分かる ごみ のこと

国内年間ごみ排出量 **4,167** 万トン

内 生活系ごみ **3,002** 万トン (総排出量の約 **72%**)

「環境省 一般廃棄物の排出及び処理状況等 (令和2年度) について」

市内年間ごみ排出量 **7,099** トン

内 可燃ごみ **4,989** トン 資源ごみ **951** トン

粗大ごみ **1,159** トン 「環境保全課 令和2年度 ごみ排出量」



樋口区 坂本明則さん(後列左)
さかもと・あきのり
大翔さん 咲笑さん
ひろと・さえみ

約6年前、内川に泳ぐ鯉を孫が見つけて、掃除を始めました。当時はごみが多く綺麗とは言い難い川でしたが、最近では地域の人たちに協力してもらってかなり綺麗になりました。子どもの頃は、川でよく遊んでいたのが内川を守りたいと思い、今もごみを見つけると掃除をします。最近では地域の人たちが川に関心を持ってきています。子どもたちにも知ってもらって綺麗な内川を未来に残したいと思っています。



1_ 樋口集会所に設置された「善意のごみ箱」 / 2_ 坂本さん家族は河川に流れたごみを定期的に拾う / 3_ 内川に流れるごみを確認する和田さん / 4,5_ 今は綺麗な内川 / 6_ ごみを堰き止める自作の柵 / 7_ 内川に棲む鯉を眺める坂本さん

CHAPTER 2

ごみへの一手
one move to garbage

昨日落ちていた道端にあったごみがいつの間になくなっていく。自然に流されたのかもしれない。一方で、誰かが掃除してくれたのかもしれない。



1



前樋口区長 和田久幸さん
わだ・ひさゆき

善意のごみ箱を設置するまでに数年かかりました。川のごみ拾いから始まり、柵を作り毎日水路を確認したりと、長い道のりでした。地域の人々の思いや生き物を守るためこれからもごみの問題に向き合っていきます。

善意のごみ箱の始まり

樋口集会所には「路上」で拾ったゴミをそのままお入れください」とプレートが貼られた「善意のごみ箱」が設置されている。ごみを拾った人が善意のごみ箱に捨てると、地域の協力者が指定場所へ持って行く仕組みになっている。「ポイ捨てされたごみの種類は多く、分別は不可欠。地区には、ごみ拾いをしてくれる人がいるけれど、自分で分別して捨てなければならなかった。以前からごみの問題がありました。坂本さんの活動がきっかけで設置することに繋がりました」と話す前樋口

区長の和田久幸さん

樋口地区の坂本明則さんは約10年前から定期的に内川のごみを拾っている。坂本さんは、「数十年ぶりに地元に戻ってきたとき、内川に住む1匹の鯉を見つけました。当時の内川は酒の瓶、タバコの吸い殻、レジ袋などのごみが散乱していて、鯉がごみを食べたりしていたのでいたたまれずごみを拾うようになり、ました」と話す。和田さんは、坂本さんの活動を知ったとき地域の問題として、樋口協議会に地域で川掃除をする提案をした。昨年春、協議会と地域の任意団体の樋好会が協力して内川での清掃が実現

今も続く「ポイ捨て」との戦い

した。元の美しさが戻ってきつつあった内川に昨年の夏、嬉しい変化があった。和田さんは「昨年は今までに見たことないほどたくさんのがが飛んでいました。川には虫の幼虫の餌になるニナ貝がいて、綺麗な川になったと実感しました」と笑顔で振り返る。

理想は善意のごみ箱がなくなる

「ごみのポイ捨て問題は続きます。理想はまちからポイ捨てごみがなくなり善意のごみ箱がなくなること。ここで終わりではなく、これからも地域みんなでごみの問題に向き合っていきたい」と和田さんは話す。それぞれの思いが一つになったとき、新たな一手が生まれる。

地域での内川清掃が終わった後も、協議会は川の美しさを保つために川や水路の一部に柵を設置するなど、ごみが流れないように工夫した。一時はごみが減ったものの、今でも地元のボランティアが川のごみや道路に放置されたポイ捨てごみを定期的に拾う姿が見られる。地元ではこれまでの活動を月刊紙を通して地域の人に発信している。和田さんは、「監視カメラを設置すると、犯人を特定することもできますが、地域の人一人ひとりがポイ捨てについて考えてくれれば」と話す。



地元で配布される「広報ひのくち」には、これまでの経緯が連載されている